

---

# 教室ジャック。

imaiwa

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
教室ジャック。

【Nコード】  
N9209E

【作者名】  
imaiwa

【あらすじ】  
教室が犯人にジャックされた。練習作品。

## （前書き）

新しい連載に向けた三人称の練習のための作品。

ある日、榎原沢高校の2年の教室に鉄砲を持った男が入ってきた。

彼の名前は真綿卓郎、43歳独身無職。

ローンの返済で困り、近くの銀行を襲って逃げたものの、すぐに通報され3分で警察がやってきたために、振り払う事が出来ず永延と追いかけられていた。

通り際にあつたこの高校を見つけると、中へ入って2年B組の教室に生徒を人質にとつて立てこもつた。

運動場にはパトカーがたくさん並び、警察官が彼に外から拡声器で説得をしていた。

「犯人につぐ、さっさと出てきなさい」

「うつせーな、生徒ども殺すぞ！」

彼は本気だ。その辺の男子にヘッドロックを決めながら、頭に銃を突きつけていた。

額に猛烈な汗を流し、大きく外に膨れ出た腹がTシャツとズボンの隙間からはみ出ている。

「ああ、糞、暑いな」

窓を開けているため、部屋の温度は上昇気味だった。生徒の一人を適当にチョイスすると  
叫んだ。

「おい、そのガキ、そう眼鏡つけたお前だ！」

「暑いから、クーラーの設定あげろや！」

彼が拳銃の銃口を向けた先にいるのは、ひよろい色白の背の高い少年、名前は紀本慶介。

このクラスの学級委員だ。

「は、はい、すぐ下げます」

慶介君は大急ぎで壁際に設置されているエアコンのスイッチを強にした。

ふー、しかし、警察のやろつ、一杯きやがったな……

どうやって逃げるか…

卓郎は悩んでいた。このままじゃいずれ、警察官に踏み込まれるのは目に見えている。

まあ、すぐには来ないだろうな、こっちにや人質は山ほどいるんだ。

ガタ！

卓郎が音に驚き振り向くと、生徒達がドアを開けて数名外へ逃げようとしていた。

我先にとドアにしがみ付く生徒達。

それが仇となってドアがスムーズに開かない。

焦って逃げようとしたデブの大田原君が田中君の上に乗りこみ、50cmほど開いたドアの隙間から頭だけ出している。

その周りにも何人か男子が群がっているが、小田原君が邪魔で出口の戸に触れる事ができない。

「ぐるじい」

大変なのは小田原君に押しつぶされた格好の田中君だ。

パン、パン！

教室に乾いた大きな音が二発こだまする。

卓郎が生徒達の様子に腹を立て、注目を自分に向かせようと天井に銃を

二発打ち込んだのだ。天井からは石片がばらばらと落ちてくる。

その音に面くらい、動きを止め一斉に卓郎の方を見る生徒達。

「きさまらー、勝手なことするなー」

「逃げようとしたら殺すぞー」

パン！

もう一度脅しの一発を天井に当てて、生徒達に恐怖を覚えこませる。

その場を動かこうとする生徒達はもつけない。

「てめーら窓側に寄れ」

卓郎が銃の先を生徒達に向けて、右側にそれを振った。中々動かこうとしない生徒達。

「死にたいのか……？」

右足を振り上げ、床に叩きつける。

その大きな音にやっと恐怖したのか、生徒達が続々と窓により始めた。

「よしよし、それでいいんだ」

押しつぶされていた田中君が一人入り口に取り残されている。

どうやら、さっきのどさくさで足を踏まれて負傷しているみたいだ。

「どうした！ さつさと右によれ坊主」

田中君に銃口を向け吠える卓郎。

「はやくこつちよ」

「頑張つて」

足を引きずり窓際に行こうと頑張る田中君に励ましのを送るのは、このクラスの女子生徒の一人亜樹原朋美だ。

肩まで伸びた黒髪、色白の眼鏡を掛けた女の子。

田中君は渾身の力を込めて、両手を前へ前へと交互に突き出して這い寄る。

その姿を見ていた朋美の隣にいた男子。鹿山雄三が右手で田中君の手を掴むと窓際まで引っ張り込んだ。

「ありがとう」

「頑張ったな」

雄三が田中の頑張りを褒め称えると、朋美も目尻に涙を浮べる。

「ふん、なに青春こつこやつてるんだよ」

「あほどもが」

卓郎は田中達に蔑んだ目を放ち、尻をかきながら暴言を放った。

「おい、ぽり公！ さつさと逃亡用の車用意しろ！」

いらだちながら窓に乗り出し、外の警察官に車を要求する。

「もうちょっと待ってくれ」

「馬鹿かオマエラ」

「俺は気みじけーんだよ」

「大体な」

卓郎は警察官に説教じみた言葉をいくつも投げかけ始めた。  
とても騒がしい。

その様子を見て取り、4人の生徒がぼそぼそ小声で話し始める。  
デブの小田原君、田中君を助けた雄三君、その隣の朋美ちゃん、  
生徒会長の慶介君だ。



「あの犯人今警察に気捕らわれてるわよ」

「チャンスじゃない？」

朋美ちゃんが切り出した。

「そう入っても、彼は拳銃を持っています」

「逃げきれないよ」

朋美ちゃんの提案に冷静な答えを返す慶介君。  
頭がよく機転のきく彼は、さすがに状況把握も早いようだ。

「大丈夫、俺なら逃げ切れるよ」

「馬鹿、お前だから逃げれないんだろ」

「そうだよ、自分の事わかってない奴だな」

デブの小田原君が思慮浅く放った言葉に、雄三君が突っ込みを入れる。

それに同調した慶介君が、小田原君のぶよぶよのおなかの肉を掴みながら

ため息をついた。

「俺の腹つかむなよ」

「デブで悪かったな」

小田原君は腹をつかむ手を払うと、大きな背中を慶介君に向け怒りを顕にした。

「でもチャンスなのは確かよ」

「まだアイツ言いあってるし」

慶介君を真直ぐ見つめると、神妙な顔で朋美が言った。

「うーん」

頭をフルに回転させ現状打破の糸口を探る慶介君。

「こいつのはどうだろう？」

雄三君が何か思いついたらしく、右人差し指をあげ周囲の面々に視線を巡らす。

………ボソボソボソ

「え、怖いな」

「完璧だわ」

「頭いいね、雄三君は」

二人は雄三君の案に笑顔で賛同したが、大田原君が少しその案に不安を抱いていた。

「大丈夫さ、うまくいくって」

「生徒会長の僕が太鼓判おすよ」

雄三君が小田原君の左肩に手を回し、ポンポンと二回軽くはたく。慶介君も突き出たおなかを撫でながら、笑顔を浮かべる。

「さあそうと決まれば実行に移そう」

「ラジャ」

萌実ちゃんが手を前に突き出して言うと、その手に残りの三人が順番に

右手を重ねた。

犯人卓郎は暑いのに大声だしていて、そのうちふら付きを覚えてその場にしゃがみこんだ。

「糞ゝあいつら、馬鹿にしゃがって」

「キヤアアア」

甲高い女の悲鳴が、突然教室内に響き渡る。

その声に驚いた卓郎が、目を丸くして起き上がった。

「どうした？」

銃を構えながら、生徒達に近寄る。

声のする方へ視線をやると、朋美が窓をのぞき込んでいた。

「おい、なんかあったのか？」

「雄三君が……窓から……」

卓郎はその怯えた表情から、只事じゃない事を悟り窓に飛びつき、下を眺める。

「おい、まじか？」

「どこだ」

顔を左に右に振りながら、銃を掴み窓の外に上半身を乗り出す。

ドカ！

卓郎は突然背中に猛烈な重圧を感じた。  
見ると、小田原君が抱きつくにしている。

「コラガキ重いじゃねーか！！ 離れろばけ」

「うーん」

卓郎が体をそらすかびくともしない。

「今だ銃を奪い取れ」

その小田原君の号令に反応した雄三君が、小田原君の背後に回りこんで

しゃがみこむと、下につきでた銃の先を思いっきり下へと引張った。

「やった！」

銃を卓郎の手からまんまと抜き取った雄三君が左手に銃を持ち替え立ち上がると、右手でガッツポーズを決める。そして、すぐにしゃがみこんだ後、床を滑らせ銃を慶介君に渡した。

「終わりだ！ 犯人」

「さあ、みんな、あいつをぼこつちまえ」

「「ラジャ」」

その後は……想像におまかせ。

終

(後書き)

やっぱり1人称のがましかな  
……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9209e/>

---

教室ジャック。

2011年1月20日04時20分発行